

生死の苦海・功德の宝海

——東日本大震災から問われる私たちの姿——

東 舘 紹 見

はじめに

こんにちは。ただいまご紹介いただきました東舘と申します。私は、七年前の東日本大震災で大きな被害を受けた三陸海岸にある、岩手県の宮古市という港町で生まれました。それで、もう三十年以上前になるのですが、中学校を卒業した後、京都にまいりました。一九七九年の四月、皆さんが生まれる二十年前です、東山区の今熊野にある大谷高校という高校に進学しました。それでその高校時代に、年に何度か、京都市内の仏教系の高校の合同の催しが花祭りとか成道会の時にありまして、三年間のうち何回か、こちらのこの講堂で講話をお聞きした覚えがあるのです。だから、今日は三十数年ぶりなのです

が、まさか私がこの講堂で話をするとは思ってなかったです。大変緊張しておりますけど、本当に大事な場だなと思っております。現在は大谷大学の文学部歴史学科というところにおりまして、日本の仏教の歴史を中心に歴史学を学んでおります。こちらの大学の皆さんとは、毎年秋に、真宗文化研究所が主催されて行う、親鸞聖人の生きた足跡をたどる聖蹟巡拝にご一緒させていただいています。とても楽しい催しですので、皆さん、ぜひ秋には参加していただければと思います。

それで、突然なのですけれども、仏教というと、皆さんどう思われますか。まだ大学生活が始まったばかりですけれどもね。何か大事なことを教えて下さっているようにも思いますが、でも何がどう大事なんだろう、というような感じでしょうか。先生方のおっしゃることを聞いて、自分でいろいろ考えて、さっそくピンと来たこともあるでしょうし、今はピンとこなくても、後で「ああ、そうかな」と思うこともあるのではないかと思えます。私たちは今、とても大切なつながりの中で生きていますよね。友だちとのつながり、付き合いも大事だし、地域や家族の方々とのつながり、付き合いも大事です。そういう時の一番根本的な問題、大事な課題を教えてくださいるのが仏教であると思います。私たち人間のわがままな心に、「どうぞ、そのまんまでやってください」「あなたが儲かりさえすれ

ば、あなたの都合が良ければ、それでいいでしょう」というのではなく、「それでいいですか？」といつも静かに対面してください。仏教であつても、キリスト教であつても、それが本当の宗教だと思えます。こちらの大学は、そういう大切な教えを建学の精神にされています。四年間あるいは二年間、ぜひ大事にしていただければと思います。皆さんは、それぞれ、看護の学び、子どもさんたちと対する学び、それから社会のいろんな局面と対していく学びをされています。どの学びもとても大切だと思いますが、その根本にある願いといえますか、根本にあるところをしつかり考えていきたいな、お互いそんな仲間でいたいな、と思えます。

今日、私が参りましたのは、先ほど学長先生からもお話しがありましたように、七年と二ヶ月が過ぎたところであります。東日本大震災の経験を踏まえて、私たちには何が問われているのかということをご一緒に考えることができればと思つたからです。今、私の息子が十九歳、娘が十七歳です。皆さんとだいたい同じくらいの歳です。息子が小学校を卒業する卒業式の一週間前に津波が来しました。みなさんは東日本大震災が起こった時には五年生だった方が多いと思いますけれども。そう考えると本当に早いですね。その時は、今と同じく私だけ単身で京都におりましたが、その時もその後も、本当にいろいろな

ことがありました。そうしたお話も一時間ほどしか時間がないですが、させていただきます。
いいと思います。

自己中心的な私と、仏さまの願い

本当にいろいろなことが沢山ありましたけれども、しかし私たちは多くを忘れるのですね。大事だと思ったこと、忘れないでおこうと思ったことも忘れてしまいます。皆さんはどうですか？ 忘れないこともあります、自分に直接関係することでない忘れてしまいますよね。そして、自分のことだと、「忘れないでおこう」と思って忘れないでいても、だんだん自分の勝手な方向に記憶が曲がっていくみたいなのもあります。私自身も、七年経つと忘れてしまっていたり、自分勝手な考えで事実を曲げてしまっていることがあります。どうしてそうなるのかと思ったら、先ほども言ったように、私たちが「自己中」だからですよね。でも、それではいけないという気持ちもどこかにあるのではないでしょう。それが、仏さまの心のようなものだと思います。自分の中から、「忘れるな」って言うてくるのです。自分はどちらかというと忘れようとしているんですよ、自己中ですか

ら。でも、「それでいいですか？」という呼びかけにあらうことがあります。友だち付き合
いでもあるんじゃないですか。「ああ、もうめんどうくさいな」と思っても、「それじゃダメ
でしょ」と言われてハツとするとか。その呼びかけのようなものに、いつも耳を澄ますと
いうか、思い起こすというか、それが、すごく大事なことだなと思います。

今日の題はすごく難しいです。「生死の苦海（しょうじのくかい）」、「生死（せいし）」
と書いて「生死（しょうじ）」と読みます。生まれて死ぬことなんですけれども、仏教で
は、ただ単に生まれて生きるということではなくて、自己中心のな者同士で相手を傷つけ
たり、傷つけられたりして生きるような、苦しみに満ちたあり方を「生死」と言うのです
ね。親鸞さんは、「私たちの人生は、そのまましていると生死の苦しい海のようなものだ
とおっしゃっています。幸せを求めている人なんていませんよ。さつきも皆さんと一
緒にこの講堂に向かって歩いてる時に、「私も幸せになりたいわー」って言ってた人が
いましたけど（笑い）。「結婚したーい」、「お金持ちになりたーい」——すごくわかりやす
かったです、正直なご意見で（笑い）。幸せって本当にそういうものだと思うじゃないで
すか。私もそう思います。だけど私たちは、そうやって幸せを求めながら、その幸せは結
局「自分だけの幸せ」になっているのではないですか。そして、多くの場合はそう思って

もないのに、相手を傷つけていくことになるわけですよ。そういう生き方が「生死の苦海」。幸せを求めながらも苦しんでいかななくてはならない。本当にそういうことって多いと思うのです。そういう人たち、同じ人間同士と、卒業したらすぐ現場で関わっていくんですね。もちろん「それではいけない」という気持ちも起こってくるでしょう。何故そのような気持ちが起こるかといえば、それは、事実として、実際に私たちの命が繋がっているから、「それではいけない」と思うのでしょう。

少しややこしい話かもしれませんが、こんなにも自分中心なあり方をしている私たち、私たちの社会だからこそ、「そうではなかった」「自分中心でいてごめんなさいね」という罪の深さが知らされ、その時、「みんなと一緒に生きたい」「一緒に生きる喜びを抱いて生きたい」「みんなと一緒にいることができよかつたな」と、本当の喜びを感じられることがあるのかもしれない。そのことを、親鸞さんは「功德の宝海」と言っています。功德というのは、仏さまの願いによって開かれた本当の喜びみたいなものです。みんなと分かち合える喜び。その宝の海です。親鸞さんは、「苦しい社会がなくなったから、みんなとの繋がりを喜べるのではなくて、苦しい自分中心の、今のこの現実にいるからこそ、みんなと一緒に、よかつたね、と思える生き方が開かれるのだ」とおっしゃっています。

す。「生死の苦海Ⅱ功德の宝海」です。これも大事なメッセージだなと思います。

どうしてこういう話を長々としているかというのと、本当に大変な出来事にあうことによって、私たちは、自分たちのありのままの、本当の姿を知らされることがあるということがあるからなのです。普段は自分にとって都合の良いところしか見てないけれども、実際は私の姿も周囲の姿もそういうものではない。私の本当の姿が知らされて、私の勝手な思いが破られて、そんなものではなかったと気づいたと同時に、本当の繋がりの大切さ、その大切さに気づかないふりをしていた私の罪深さが知らされるのですね。だから、東日本大震災も、起こってからすでに七年と二ヶ月が経っていますけれども、そういう意味で、私たちが決して忘れてはいけない、大事な機会ではないかと思うのです。またこのことは、私たちは人生でいつ大変な場面に遭遇するかわからないわけですけれども、それが、本当の願いに出あっていく、大事なご縁になるんだということです。普段、宗教というと、「何かを拜んだら自分に都合の良いことが起こる」みたいなことだと思っっていますが、本当の宗教とはそういうものではないと思います。私の本当の姿を知らせてくださるのが宗教の大事なはたらきではないかと思えます。「あなた、それ自分の勝手じゃないの」と教えてくださる。子どものためだとか、親のためだとか、生徒のため、先生のため、とか

言ってるけど、結局自分しか可愛いと思っけないじゃないか、と言われる。そういう本当の意味での大切な教えを大事になさっているのがこちらの学園です。

震災直後の日々から知らされたこと

そろそろ震災の時のお話しに入っていきたいと思います。私の生まれ育った街は、先ほどもお話しましたが東北地方の太平洋側にある岩手県の宮古市という街で、東北の太平洋側で海の方に向いて一番出っ張っているところになります。今、スクリーンに映っているのは、津波から三ヶ月ほど経った頃に、その宮古の街が面している宮古湾の近くにある市役所の五階から、海のほうを見て撮った写真です。向こう側に見えるお山のようなのが半島で、ずっと太平洋に突き出しており、この半島に抱かれる形で宮古湾という湾があります。手前に映っている川は、その湾に向かって流れています。市内には、この川を遡るようにして波があふれてきたのです。次にこちらの写真は、地震津波が起こった当日、先ほどとほぼ同じ場所から、たまたま市役所に来ていた新聞社の方が撮った写真です。みなさんも映像でいろいろなところの様子をご覧になったりしていると思うんですけ

ど、宮古市街の場合は、ここに映っている五メートルある堤防を簡単に波が乗り越えて、港の方にあった船などが街の中に流されてきているのです。本当に信じられない映像でした。

地震・津波が起こった時、私は京都にいて仕事をしていました。震災が起こった年は、ちょうど震災の日から数えて約一週間後から、三か月ほどもかけて、東本願寺で、浄土真宗を開かれた親鸞さんが亡くなって七百五十年目の大きな行事をやる予定になっていました。私は大学での仕事の関係上、平安神宮の近く、岡崎公園の中にある京都市美術館というところで、親鸞さんに関する展覧会の準備作業をしていたのです。確か三月十一日当日は金曜日で、土日は喜んで次の週にはもう展覧会が始まるからと、みんなで頑張ってお借りしてきた作品を展示する仕事をしていました。そうしたら、掛けようとしていた掛け軸が、ゆっくりと揺れ始めたんです。皆さんはどんな揺れだったか覚えていますか。関西もけっこう揺れましたね。確か京都では震度3ぐらいだったと思います。で、「ゆっくりした揺れだね」「これは、遠くの大きな地震じゃないかな」と言っていました。一緒に仕事をしてきた友人がすぐパソコンを開いてくれて、インターネットで情報が入ってきました。それですぐにどんな地震かがわかったんですよ。「あなたの家の近くが震源だ。大

きな津波が来ると言っている」。信じられなかったです。しかし、どういう状況なのかまだわからず、「大きな地震が起きているようなので、今日は早めに仕事をやめましょう」ということになって、職場の友人と一緒にとりあえず学校までタクシーで帰ったんです。私はその当時、携帯電話をまだ持ってなかったんですね。「電話なんて、必要な時はあるところに行つてかければいいんだ」という派だったんですよ。だから、その友人から携帯電話を借りてタクシーの中からかけたんです。その時間は、地震が起こってから三〇分後だったので、ちょうど宮古をはじめ沿岸の各地に津波が到達している時間帯でした。私の連れ合いの番号にかけたら、その時だけ電話が繋がったんです。向こうは街に買い物に出ていたのですが、この写真に写っている少し高いこの山の下あたりに小学校があったのですけれども、そこに子どもを迎えに行きまして、同じこの山の裏側に私が生まれた寺があるのですが、そこまでこの山を通つて帰る途中だった、つまり少し高いところにいたので電波が入りやすかったようなのです。そこから街に津波が来ている様子をまのあたりにしている、その最中に電話が繋がったんです。「大変なことになっている。全部流されている」という言葉が電話から聞こえてきました。木造の家は浮いてしまつて流され、何かにぶつかったところで壊れていくんです。自動車ももちろん浮いて流されていきます。

「家も、車も、みんな流されてる」と言っていました。「子どもと私は、とりあえず無事だけど、（私の両親も一緒に住んでいますので）父と母はわからない」と言われ、そこで電話が切れてしまったんです。そしてそれからあと二日間は、家の人だけでなく宮古のどこに電話をかけても全く電話が繋がりませんでしたし、宮古出身で別の地域に住んでいるあなたに連絡してもやはり同じような状態で、宮古の人とは連絡が取れませんでした。テレビやパソコンには中継や録画の映像が映りますので、それをひたすら見て、夜中も、避難所が映るとそこに避難者の名前とかが出ますから、知っている人がいないか、家族や知人の名前がないかひたすら見ている、というような状態が約二日間続きました。とても横になる気にはなれず、時々目が閉じてしまつてまたハッと起きて、ということの繰り返しでした。地元と全く連絡が取れない中で、本当にものすごい映像が繰り返し繰り返し流れるんです。みなさんもいろんな経験をなさっていると思いますが、本当に信じられなかつたです。食べるものもほとんどのどを通らず、うつらうつらして、ハッと起きると、「もしかして夢じゃないかな」と思うんだけど、でも夢ではないんです。名古屋とか京都に宮古出身の方もいましたから、「何かわかったら教えてね」と電話をかけたんですけどなかなかわからなかつたです。

それで二日経った二三日の昼頃に、連れ合いが電話が通じやすいところに車で移動してくれて、そこから電話をかけてくれたんです。父親も一緒の車に乗って来てくれていて、「私も生きてるから」と。その時までには本当に地に足が着かないっていうか、ボーっとした感じでいたものですから本当に生きていて良かったと思えました。そして、その日の夜、ちょうど上越新幹線が運転を再開したんです。それで、私のすぐ下の妹が新潟に行っていたので、そこを頼ることにやっと思ひ至り、その日の深夜に新潟まで行きました。丸一日新潟で過ごして、その間に皆さんから、お米やストーブやお水、その他沢山のお品を頂きまして、それをワゴン車にいっぱい積んでもらって、妹の連れ合いさんと一緒に新潟を出発しました。一四日の夜に新潟を出て、翌一五日に宮古に着いたのです。

それから半年間、勤めている学校をお願いして休ませて頂き、みんなと一緒に暮らしました。九月になっていったん京都へ戻ってきて、後は長期休暇以外は月に一、二度ほど戻るという形が続いています。今は向こうに住んでいるわけではありませんし、実は明日もまた帰るんですけど、月曜日の夜にはこちらに戻ります。行ったり来たりしているような私が、被災した地域の様子や経験について話すというのもどうかと思うんですけど、しかしこの度の経験を通じて、私自身、本当に大事なことを教えていただいたと思っています

す。それを何とかこの機会に、七年経って私自身も忘れがちになっていることをみんなと少し共有したいなという気持ちで今日は来たわけです。

また写真を見ていきながらお話したいと思います。これは波が引いた後の寺の近くの町内の様子です。いうまでもないことですが、ここにも皆さんの大切な家が普通に並んでいたんですよ。その懐かしい街がめちゃくちゃになってしまつて。町内でも知っている方々が亡くなくなりました。街の中にもこうして船がやって来て。海から運ばれてきた泥の何ともいえないにおいが何ヶ月もしました。こちらは、特に津波の勢いが強かった地域の被害の様子です。波が強く襲つてきたところでは、こうして防波堤も防潮堤も粉々になつてしまつているのです。それからこれは、宮古から離れた地域ですが、そこにある小学校です。海の近くではありますが比較的高い所に建っているのですが、学校まで波が上がってきました。ここも多くの方が避難しておられたのですけれども、何人かの方が亡くなられました。同じ学校の体育館の様子です。今は嵩上げがされた上で建て直され、新しい建物になつてはいるのですが、直後はこんな感じでした。床が大きく波打つてしまつており、壁の時計も地震が来た時間で止まつてしまつています。こちらは六年生の教室の写真ですが、私の長男と同じ歳でもう少して卒業式だったんですが、先生が書いた黒板の文字もそ

の日のその時のままになっていますね。

これは、避難所になりました私が生まれた寺です。全員ではないのですけれども、一緒に暮らした近所の人たちと、小学校の卒業式の日、「天気も良いので外で撮ろうか」とみんなで撮った写真です。こちらはその小学校の卒業式の日の写真です。体育館が避難所になっていきますので、特別教室で卒業式を行いました。「命を大事に。みんなは、亡くなった人の命の分も生きています」と校長先生が涙ながらにおっしゃってくださって、その言葉は今でもみんな忘れてないと思います。

考えてみたら、私たちの命は、繋がっているんですよ。昨夜も今朝も皆さんご飯を食べて来たでしょう。そして、みんなのご先祖——、親のことは知ってる。おじいちゃん、おばあちゃんについても大方分かるかなと思うけど、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんになるとどういう方だったのかだんだん分からなくなってきましたね。だけど命は、縦、横、斜めに、みんな繋がっています。そういう命の繋がりの中にみんないますよね。普段は忘れてしまっていて、そうした繋がりから切り離して、私の命はつまらないとか、私の命はこうだとか、すぐはかかってしまう。七年前の震災以後は、特に、「そのものさしはあったのものさしだよ」と教えてくださるはたらきのまっただ中にある、そのことが教えら

れましたよね。それって、日常でも忘れてはいけないことだと切に思いますが、どうでしょうか。震災を通じて大事なことを教わったということはそういうことだと思います。この時、校長先生からは、「みんなしつかり生きていかなきゃいけない」というお話しを聞きました。避難所にいる地域の皆さん、それから支えて下さっている自衛隊の方とか、警察の方、消防団の方、皆さん大変な状況の中で、お祝いをして下さいました。

こちらの写真は、天気の良い日に、壊れてしまったおうちから使えるものを取り出しに行っているところです。真ん中の黄色いおうちがこちらの方のおうちで、寺でしばらくの間、一緒に暮らしていた人です。二階の部分は残っていたので、布団や衣類などを運び出したりしていました。

照らされ破られることの大切さ

こちらの写真は、六月に寺で行った、亡くなった人たちを追悼する会の時のものです。普段の行事では考えられないくらい、とてもたくさんの方がお寺に来られました。あの頃は、特にみんな、「生き残った私たちは、あなた方の分までしつかり生きていきます」と

いう気持ちでしたと思います。

たくさんさんの支援もいただきました。これも、お寺の写真ですけど、ここに全国から送っていただいたいろいろな支援品を置いて、必要なものを持っていったたく。また、運んで行っておわけする。避難所や仮設住宅などでの大きな行事の時には、社会福祉協議会やいろいろな団体と連携して、無料バザーなどを行いました。

こちらの写真は、ボランティアで来てくださった愛知県の方々と一緒に動いた時のものです。こちらの方々は、本当に何度も来てくださったって、「よくおいでくださいましてありがとうございます」というと、「私たちは本当に大事なことを教えられていると思います。ありがとうございます」とおっしゃってくださいました。私もこの人たちから大事なことをたくさん教わりました。私は、こうした出会いが、親鸞さんがおっしゃった、「自分のものさしが破られて照らされる」ということの具体的な姿ではないかと思うのです。「今起こっている現実、それはあなたがあなたのものさしではかっているような、そんなものじゃないよ」、そうした私のものさしを破って下さるはたらきに、具体的な人や出来事を通して出遇うということです。たぶんあなた方も、授業ももちろんそうだと思いますが、特に現場に行けば、患者さん、子どもさん、社会の人たち、みんなから教えられるこ

とだと思えます。そうした時に、一つ一つ、「そうだな」って気づき続けて、自分の固いものさしを破られ続けることがすごく大事なことでないかと思えます。本当にそういう意味で、この人たちは大事なことを教えられている、とおっしゃっていたのだと思います。そういう気持ちでなさつてくださるので、何というのでしょうか、支援活動が決して「上から目線」ではないですよ。自分が困っていない立場で困っている人に何かしてあげよう、そういうような気持ちですと、困っている方はとても情けない気持ちになるものですよね。それでもありがたいですけれどもね。「そんな支援はいらないです」と言われることもあるかもしれません。だけど、この方々から教えていただいたことは、決してそういうことではなかったです。具体的に動いていく中で、お互いの姿の中に大事なことをいただき、素直な気持ちで頭が下がる、そういう場があつたと思います。そうすると、支援する側、支援される側を超えた関係ができていくんですよ。これは、看護とか教育の場でも通じる話なのではないでしょうか。自分のそれまでのものさしがゆらぐ大変な時は、自分が一番変わっていくチャンスでもあると思います。しかし、人間は弱いですから、すぐ「元通り」にしようと思うんです。自分自身（のものさし）が居心地の良いところへもう一度逃げ込もうとするんですよ。でも、「そんなもんじゃないよ」と引っぱり

出してくださるはたらきが必ずあるんです。そういうはたらき、そういう人と、ぜひ大事な関係を作っていきたいなと思います。

ばらばらな話になってしまっているんですけど、もう少しこの時の支援の様子と一緒に見てみたいと思います。こちらも同じ時の写真で、美容師の方が皆さんの髪を整えて下さっている時のものです。六月頃、ちょうど避難所になっていた小学校の体育館から校庭に作られた仮設住宅に移る頃に行われた催しの時の写真ですけど、みんな喜んで、楽しいお話しもいろいろしたりして大声で笑ったり、「何ヶ月ぶりに笑ったー」とおっしゃって下さる方もおられました。そういう支援というか活動も、私たちが普段の自分のものさしだけでやったのではできないし、開けてこない関係ですよね。それを破られるというのはお互いすごく大事なことだなあ、とこの時も感じていました。

こちらにも別な場所で行った催しの時に撮った写真です。この時は別の団体の方々が青空喫茶などをしてくださり、無料バザーなどを一緒に行いました。「本当にご支援ありがとうございます」「感謝しています」という気持ちは、皆さん持っていらっしゃったのではないかと思います。

それから、こちらは、震災からだいぶ経った頃の、穏やかな宮古湾の姿を撮った写真で

す。話が震災直後の頃のことに戻ってしまいましたが、私は、三月一五日の早朝に宮古に着きまして、寺の方へ上がっていく前に、港のところまで車を降りて海の方を見たのですが、その時の光景が、まさにこういう感じでした。すごく静かで穏やかだったのですよ。いつもと同じような朝焼けで、いつも見ていた海ですから、何というか、「おかえり」と言うてくれているように見えたんです。こんなひどいことをしておいて「おかえり」もないもんだとその時は思った記憶がありますが、本当に何にもなかったような顔をしているように思いました。そして人間が作ったお家や色々な施設などはほとんどすべて壊れてしまっているのです。そうして、寺の方へ上がって行って、みんなと会いました。みんな、本当にうずくまって暮らしている感じでした。人間の力ってこういうものなんだと、知らされたように思いました。今日もクーラーが効いていますよね。何不自由ないという又何ですけれど、今の私たちって本当に恵まれています。だけど、その恵まれた（？）環境というもの、すぐくもろいものなんだなと思えました。そういうことをいつも忘れないということも、大事なもののさしを照らすはたらきによるものなのだ、ということも思えます。

親鸞さんは、海がとっても好きだった、というか大切にされたみたいですね。「生死の苦海」「功德の宝海」という言葉は、どちらも親鸞さんがおっしゃった言葉で、おそら

く海の恵みをいただき、その恐ろしさも日々感じつつ生きている人たちと一緒に暮らす中で、感じられたことをお言葉にされたのだと思います。怖いところだけでも大事なところ、優しいけれども怖い、そこを忘れては、自分に都合の良いところだけをものさしで切り取ってしまうことになりますよね。

現在の状況から見えてくる問題 — 「復興」とは？ —

順番にお話をしようと思ってプリントも準備してきたのですが、その通りにはいなくなってしまうました。すごく駆け足になると思いますけれども、以下はプリントに記してある内容に沿って話していきたいと思います。

現在の状況なのですけれども、これは被災地によって本当にいろいろ違いますし、細かく言えば一人ひとりで違いますから一般的なことなどなかなか言えません。私の関わっている宮古市の、それも私が見聞きしているところに限ってお話します。

宮古市の周辺では、今、「復興道路」という名前の立派な道路がすごい勢いで造られています。最近の写真を持ってきていないのですが、山が見る見るうちに崩されていって、

すごく立派な道路ができ、復興住宅もどんどん建てられています。一般的に言えば、震災の直後と比べるとすごく快適になって、また震災以前より便利になりつつあると思います。だけど、これは震災前からそうなのですから、東北は、「日本の中心」部の東京や太平洋ベルトから遠いので、そこに人材を供給するという、そういうスタイルというか位置づけが、明治時代以降まったく変わっていないんですね。そういう方が、今回の震災を期に、また一気に加速している感じがしています。これは、東北だけでなく日本という国全体を考えた時にも、本当に本当に深刻な問題だと思えます。都市部への人口の集中化がいよいよ進む。人々がどんどんいなくなっていくのですね。

それから、仮設住宅に今まで住んでいた方々の、災害公営住宅等への移居が進んでいます。それで良くなった面ももちろんあるけれども、たとえば仮設住宅はおうち同士がピツタリ繋がっていますから、お隣の声も聞こえたりすることもあるんですよ。そうすると、「おばあちゃん、今日は静かだよね、ちょっと声をかけてみようかな」ということもできるので、立派なアパートになってしまつと、なかなか様子がわからなかつたりして、お互いに敷居が高くなっているという面もあります。元気な時はお互い敷居が高い方が自己中の生活ができていいのですけど、これからの社会はそういう関係だけではとても

やっていけないだろうなとも思います。孤立したり、行き場を失っていく人たちもたくさんいます。未だに、今後の生活、この町をどうしていくのか、という方向性やビジョンが描けないことが大きな問題としてあります。

それから、たくさんの、亡くなった方、行方不明の方々が身近にいるということです。七年が経っていますけれども、これが、なかなか気持ちの前に進められない大きい原因の一つになっています。助かった、生き残った人たちも、「私はこれ以上何もできない」という無力感を抱いたり、亡くなった人に対する罪悪感を抱いたり、孤立、孤独がむしろ深刻化しているといっていると思います。

それから、これもいうまでもないですけど、福島の大東電力福島第一原子力発電所をめぐる問題があります。いうまでもないことですけれども、あれは東京に電気を送る施設なんです。それが福島にあるのです。大阪や京都に電気を供給している原子力発電所はどこにありますか。ご存じですよ。若狭湾にあります。これも忘れてはいけないことだと思います。どうしてそういうことになるのか。本当に大きな問題だと思います。自分さえ良ければいいという、人間の一番根本の問題ですよ。原子力発電所をめぐる深刻な状況は今も続いています。報道が少なくなっていますけれども、放射線の被ばくの問題です。

除染といっても、全地域を除染することは難しいですから、人間が立ち入らないところで命を得ている動物や植物、生態系全体に及ぶ影響はいよいよ深刻化しています。そして、そういうところから「私は関わりたくない」と思う人間の弱さ、醜さが差別を生んでいくという大きな問題もあります。今も原子力発電所をめぐる問題は進行し続けています。如何に私たち人間のものさしが見えてないところが深くて大きいか、を示している問題です。みなさんも、大事な問題だと思っっているとありますけど、根本にあるのは私たちの自分勝手さ、罪の深さだと思えます。多くのみなさんのご支援のお陰で被災地は復興しつつあると思います。しかし、震災前からの「強い者が勝っていく」という社会が抱える一番深い問題は、またしても現れ続けていると思います。

今回の震災では、苛酷きわまりない、とても受け止められないような現実の中で、私たちの姿が知らされました。しかし、様々な意味で当時の状況は忘れられようとしています。しかし一方で、忘れることができない現実も、のしかかって来ています。私たちは、どうすれば忘れずにいられるのか、ということですよ。私たちは自己中心的ですから忘れるんですよ。「忘れちゃいけない」って言われ続ける、そのことを大事だと思いつける。それが「忘れない」でいられる方法ではないかと思えます。

「復興」という言葉があります。「復」は、「復（ま）た。もう一度」という意味、「興」は「興（おこ）す。盛んにする」という意味です。だから、もう一度盛んにしようというのが「復興」なんですけど、何を、どう、もう一度盛んにしようとしているのか。震災の前と同じにすればそれでいいのでしょうか。見えてなかったことを知らされたのに、人間のものさしで、「前より立派なやつを造れば、またいけるんじゃないの」ということで「復興」しようとしているのか、「いや、そうじゃない。これを機によく考えて、大事だと思っていたけど忘れかけていたことを、もう一度おこしていかないと」と、今の私たちよりも謙虚な気持ちでいた時代、考えをも振り返って、時代は変わっているけれども、その視点をもうちよつとしっかり頂いていかなければいけない、そっちに帰って「復興」していくのか。どうなんでしょうね。何を興そうとするのかは、私たちみんなの課題でもあると思います。気づかされたことを受けて、私たちは何を「復た興そう」としていいのでしょうか。

「逆縁」

先程から申しておりますように、私たちは、大変な状況だからこそ、それを、大切なものに出遇つていく機会にしてきたんですね。こうしたご縁の受け止め方を、「逆縁」と言います。とてもじゃないけどご縁とかいう言葉では受け止められない、そういう状況です。「縁」は仏教の言葉です。今日、みんながここに集まって、私がみんなの前でお話しをしている、このこともまさに「縁」によるものです。私は「今日、ここに来てください」と言われて来ることになったんですけど、こういうことになったのも、それ以前からいろいろな経緯があるからですよ。それは何もはかってしたわけでもないですよ。みなさんもそうだと思います。隣同士で一緒に話したり、時に喧嘩をしたりするのは、私が計算してやっているという部分もあると思いますけど、それは私のものさしでそう思っているだけで、実際には本当にはかり切れないいろんな要素によってそうなっているわけじゃないですか。それを「縁」と言います。すべて大事な「縁」によることです。私のものさしに都合の良い「縁」もあるでしょう。でも仏教が一番大事にしてきた「ご縁」というの

は、実は、「これはちょっと、とてもじゃないけど、いやです」——、私のものさしではとても受け入れられない。だけど、事実はそうなのだ、そこにちゃんと立たなければいけないと教えてくださるのが仏さまの教え、仏教なんです。厳しいですよ。こうした、私が見ないことにしてきた身の事実を厳しく教えて下さるようなご縁のあり方、これを「逆縁」と言います。私たちの先輩方は、「この逆縁こそ、教えに会っていく、みんなに会い直していく、大事なご縁です」と受け止めてきたのです。

『観無量寿経』というお経の中に、こうした逆縁のことが出てきますね。もしかしたら仏教の授業などでお話しをお聞きする機会があったかもしれませんが、とても大事なお話なので、ぜひ、お聞きになっていただきたいと思います。お釈迦様が生きておられた頃、インドの国で実際にあったお話です。

お釈迦様が教えを説いていた国のおきさきさまⅡ王妃さまは、とても聡明な人でした。立派な王様と、よくできた息子Ⅱ皇太子がいて、何の不自由もなかった。ところが突然、息子が反抗し始めて、お父さんである王を殺してしまうのです。そして、お母さんも殺そうとする。でも殺すのは思いとどまって牢屋に入れてしまうんです。お母さんはもう何も考えることができない。「どうしてこんなことになってしまったの・・」。でも、実際には

父である王や母である王妃がしたことがいろいろ関係してそうしたことになっているので。「今まで私は何不自由ない生活をして、ありがたい、ありがたい、などと思ってきたけど、何もわかってなかった」と、自分に本当に大切なものを求める。その時、「お釈迦様、どうか教えてください」と言ったら、お釈迦様は、本当にすぐに、目の前に来てくださった、とお経に書いてあるのです。

ここから始まるのが『観無量寿経』というお経です。私たちは、絶望することがあるかもしれないけど、まさにそういうのもろい私たちのために説かれているのが仏さまの教えであると思います。大切なことは、共にある命だということ、そして私たちはすぐその事実から目を背けようとするということです。それをこちらの大学にいらっしやる間に、学長先生はじめ先生方と一緒に感じていただきましたと思います。「逆縁」は、その時はとても「ご縁ですね」などとは受け止められないものだと思います。「何でこんなことになるんだ」と、本当に信じられない。私の場合は家族が無事でしたけれども。親御さんを亡くした方もいらっしやいます。お孫さんと一緒にいて、一緒に繋いでいた手が離れてお孫さんを亡くしてしまわれたおばあちゃんもいらっしやいます。自分のものさしでは切り切ることができるような人生だったら、本当にもう生きていく甲斐はないのではないでしょう

か。そうした状況が、本当に厳しいとしか言いようがないですが、「逆縁」のもとでの状況です。

自分のものさしでははかることのできない、「あなたはそれでいいの？」と言ってくる様々な促しを「光」といいます。こちらのお仏壇、お内仏にご本尊がありますね。光が出ていますでしょう。自分中心の私たちの暗い闇を、「それでいいの？」と照らし続けてくださっているはたらきです。私のものさしでははかれないのちと光のはたらきを、インドの昔の言葉で「アミダ」といいます。この忘れてはならないはたらきを私は大切に生きていきます、忘れたらまた思い出させてください、ありがとう、ごめんなさい、こうした内容を表す言葉は、やはりインドの昔の言葉で言いますと「ナム」です。大事にして生きていきます、頭が下がる、頭の上げようがありません、ということ。あなたの命も私ははかれない、そういうあなたと今、会えました。ありがとうございます。あなたのことはとてもはかれない、なのにまた、はかってしまっています、ごめんなさい。これがナムということでしょう。「南無 阿弥陀仏」と称えることによって、いつも私は自分の都合で何かをしようとしている、ということが常に照らされてくる。大変厳しいですけども「逆縁」を通して教えられることがある。それを私たちの先輩方は大事にしてき

ました。仏さまを礼拝するといつても、本来は決して、「自分の都合良くいきますように」
つてお願いするのではないのですね。

私が生まれた東北地方の東海岸というところは、明治二十九年、西暦でいうと一八九六年、今から一二二年ほど前にも大きな津波があつて、その時も二万二〇〇〇人くらいの方が亡くなつて居るのです。今回は堤防とか防波堤など立派なものが造られていたところに津波が来たのですが、そのような状況のもとであつても、行方不明の方も合わせると一万八〇〇〇人くらいの方が亡くなつて居ます。その二万を大きく超える方々が亡くなつた明治の三陸大津波の時に、私の生まれたお寺ができました。その当時、お寺をつくつた地域の方々がおつしやっています。「コノ空前ノ大災害ニ遭遇セシ逆縁ヲ大因縁トシテ」お寺をつくります、と。お寺はどういうところか。みなさんの場合ですと、この学園のこのご本尊はどういうところかといつたら、いのちと光に出遇う象徴的な場ですよ。もちろん、お寺じゃないと、この講堂じゃないと出遇えないということではないですよ。やはり大切なことを一緒に確かめる場ですね。みなさんのおうちにも仏さまはいらっしゃいますか？ 安置されている場合もあると思いますけれども、ない場合は、それではそこにいないかといつたらそんなことはないですよ。ご飯をいただくときにもおられ

ますよね。トイレにもおられますよね。私が気づこうとしないだけです。毎日いたたくご飯にしても、私たちは、好きなものとは出会いたい、嫌いなものとは出会いたくない、すぐ分けていきます。でも、その場所、その場所が、全部、お友だちと一緒にいる時も、授業中も、いのちと光に出遇えるところなんです。それを最もはっきりと確かめられる場所が仏さまが安置されている場所ですよ。そこだけにいるわけじゃないですけど、やはり出遇える大事な場所です。そういう場所をみんなで大事にしたい、そこを拠点にみんなで活動したい、と思つてつくつてくださったのが私の生まれたお寺なんです。そういう意味では、まだできてから百年と少ししか経っていなくて、比較的新しいお寺なんですけど、新しくても古くても、お寺とか、それから神社も、元々はそういう場所だと思ひますよ、私は。自分に都合の良いことだけをお願いしに行くような勝手な場所では本来ないと思います。私の「自分だけ良ければ根性」みたいなものをちゃんと教えてくださるのが本當の宗教だと思ひます。そういう場を求めてつくつてくださったのがお寺だったんですね。そういうことも今回は改めて知らされました。仏教の教えを深く知つていないか、それは知つての方がいいのでしょけれど、単に自分の知識として、自分のものさしを立派にするものとして知つていたら、逆にそれで相手を傷つけることもあるかも

しれない。だけど、仏教の教えが願っていることはそうじゃないでしょう。言葉で知っているか知らないかよりも、その教えによって、命をどれだけ深く生きているかということが大切なのでしょうか。

震災以後の活動も、本当にいろんな宗教に属する方々と活動しました。キリスト教の方、神道の方、天理教の方…、だけど、みなさん願っていることは同じというか、本当に通じているなど私は思いました。私の根性は自分中心で、自分の思い通りにいかないと、こんなにもみんながしんどい状況でも腹が立ってしまふんです。あるいは勝手に落ちこんだりするんですよ。この活動は一体何のためにやってるんだろうとか。落ちこんでるひまがあるくらいだったら動きなさいって、もう一人の私がいたらそう言っただろうけど、「ありがとう」って言われなくて、「何でこんなことやってるんだ」とか、「何様のつもりだ」というようなことを言われてしまうと、あるいは言われなくても自分でそれこそ勝手に思ってしまうと、本当に凹んでしまって動けなくなっちゃうんです。だけど、それ自体が大事なことですね。なかなかそうは思えませんでした。私のものさしが照らされているという事なんです。そういう私を助けてくださった、「一緒に行きましょう」って言うてくださったのも一緒にいたみんなです。それは、何宗とか何教とか関係なかったです。

はかることができないいのちと光に出遇っている、ということがそこにはあったと思えます。そのことは、私たちの平常の生活においても大変なことだと思えます。私たちは日常で、自分のものさしを上手く通せる生活をしようと思っただけから、なかなか気づけないんですね。こういう大変な状況は、間違いなくそれを気づかせてくれる大事なご縁になると思います。みなさんはどう思われますか。

看護とか介護のお仕事は、それこそ私がかはかることなどできないことですが、身や心が自分の思い通りにならない人たちと常に一緒にいるお仕事ですよ。私は元気で良かった。「この人、かわいそうだな、思い通りにいかなくて」という思いでたとえ寄り添ったとしても、寄り添ってもらった方も、寄り添った人も、本当には喜べないんじゃないかと思えます。教育の場でもそうでしょうね。「この人は全然わかってないわ。教えてやんなきゃ」とって感じでは上手くないんじゃないですかね。だからといって、同じ立場かと言ったらそれは違うわけです。じゃあどうやったたら、教育は、看護は、社会は成り立ちますか。本当に難しいけど大事な問題だと思います。

いのちと光に出遇う生き方を本当に大事にしてください。それが親鸞聖人です。そういう意味で「尊敬すべき人」には違いありませんけど、われわれとレベルが全然違う人ではな

い。われわれと同じように生きていく中で、みんなにとって大事なことは何だろうと、みんなと一緒に生涯確かめ続けた人です。九十歳まで生きられました。当時からしたらすごい長生きだと思えますね。八十歳になっても離れて暮らすことになった人たちとお手紙のやりとりをしています。質問に「こうだと思おうよ」って、遠く離れた人とも一緒に生きていくという気持ちで最後までやりとりされていきました。その方が亡くなった後、五十年に一度、その大切な教えを確かめる法要の年に、東日本大震災が起こったんです。しかも、一週間前に起こった。これは偶然なのですけれども、やはりすごく大事なご縁だと私は思わざるを得ません。これを機会に、私たちは改めて、自分の身の上に、一人ひとりの身の上に、みんなと共に生きることの意味を確かめていかななくてはいけないんじゃないかと思えます。共に生きるということは私にとって都合の良いことばかりじゃないですよ。むしろめんどくさいほうが多い。私のものさしの尺度です。それをしっかり教えられるということが共に生きるということでもあると思います。そうしたものさしの手ごわさを教えられることがなければ、「ごめんなさい」「ありがとう」、さつき言った言葉では「南無」という気持ちも起こってきませんよね。本当の意味での「ごめんなさい」「ありがとう」、それは、自分に都合が良いことが起こった時の、勝手な感謝、勝手な御礼の言葉とは違うと

思います。頭が下がる、その時に「みんなと一緒に生かさせていただきます」というと変ですけど、「一緒に生きていきたいです」という、本当の意味での謙虚な気持ちになるんだろうと思います。

「ほとけさまは どこにいらっしゃる？」

私はみんなで一緒に歌を歌うことが好きなんです。今はほとんどしてないんですけども、以前はけっこう一生懸命コーラス、合唱をやっていたんですよ。こちらの学園にもよくお話しに來られて、この時間にも何度もお話をなさっていた岩手県が出身の先輩とのご縁もあり、コーラスをしていたのです。楽しいのですね、一緒に歌っていると。いろいろなジャンルの音楽があつて、それぞれ好き嫌いもあると思うけど、たとえ何のジャンルにしても、音楽つてきつと、みんなと一緒にやる時は特に、「自分が正しい」と思つたら上手いかなんじゃありませんかね。だからといっていい加減な音を出していたらそれも上手いかないのですけれども。みんなと一緒に、自分の分を守りながら、何というか、自分を開いていく、自分を開いていくと相手の声が聞こえ、それを聞くことで自分の声も相

手に響いていく、音が一つに駆け合っていく、そんなことがあるんじゃないかと思えます。私の父も音楽が好きだったので、お寺でコーラスの会などもやっていたんですよ。それで仏教の歌も歌っていたんです。歌詩をそこに書いています。何年か前に『千の風になつて』という歌が流行りましたが、あの歌の内容とも通じる部分があるように私は思っています。

「ほとけさまは」という題の歌です。「ほとけさまってどこにいらっしやるんですか？」という内容です。「♪ほとけさまは どこに どこに いらっしやる？」っていう感じですね、四部合唱で、とても良い歌なんですよ。

1. ほとけさまは どこに どこに いらっしやる？

春は 花咲く枝のもと 夏は 水辺の草のかげ

秋は 空ゆく雲の上 冬は 窓打つ雪の中

いつも どこかで 見ていてくださる

いつも 何かを おしえてくださる

ほとけさまは あれあれ あそこに いらっしやる

2. ほとけさまは どこに どこに いらっしやる？

おまゆ真白な おじいさま おめめ優しい おばあさま

おむね豊かな おとうさま おてて清らな おかあさま

昼でも 夜でも まもってくださる

いつも あなたを ささえてくださる

ほとけさまは あなたのおそばに いらっしやる

私自身、とても良い歌だなあと、本当にそうだなと思ってみんなと歌っていたんですよ。ところが震災の後、一緒に歌っていた方が、お寺で、「ああいう歌ありますよね」「でも震災の時はとってもそんなこと思えませんでしたよね」って言われました。先ほどのインドの王妃さま、韋提希夫人とおっしゃるので、その方じゃないですけど、「私が今までありがたいと思っていた仏さまなんて、本当はいないのかもしれないけれど、「おっしゃいました。でも、その後、その方は続けてこうおっしゃいました。ここに書いてあるのはその方の言葉です。」

「ほとけさまは」という歌がありますよね。

津波の時は、とてもそう思えませんでしたね。

でも、これで世界は終わるのかな、神も仏もないのかな、というところから教えを聴き始めたのが、このお寺なのですね。

そう思うと、やはり「何でこんな目に遇わなくてはならないのでしょうか」という状況の中にも阿弥陀さまはいらっしゃるのですよね。

とおっしゃったんです。私たちが、痛くもかゆくもないところで、「ありがたい」「ありがたい」と言っているうちは、本当に大事なものは出遇えないものなののでしょうか、とおっしゃっていました。そして最後にこうおっしゃいました。

津波の夜は、星がすごくきれいでした。

あれは、東北の電気が全部消えていたからなんでしょうかね。

一日は私は京都におりましたのでその夜の空を見ていないのですけれども、その夜は星

がとてもきれいに見えたとみなさんおっしゃいます。このお言葉は、本当にすごい言葉だったなあと、いまだに思います。人間のものさしが間に合わないということを知らされるという事は、本当に辛いことだけでも、そこにこそ仏さまはいらっしゃるということがあるんですね、というお言葉だったと思います。

だから、復興するとか、災害に遭わないようにするとかはもちろんとても大事なことですけど、そちらのほうばかりに目を向けていくことによって、見えなくなっていく部分も大きいということがあるのではないかと思えます。本当に忘れてはいけないことは何なのか。これから私たちは本当に考えていかないと、人間って、この会場にいる私たちだけじゃなくてみんな自己中ですから。「自己中なものさしだけを頼りにしては生きていけません」ということを、お互いに、阿弥陀様の命と光のはたらきをいただき続けないと、すぐまた前と同じことをやってしまうことになるのではないのでしょうか。だから、お互いに照らされつつ、「それはいけないんじゃないでしょうか」と言っていくということも大事な仕事ではないかと思えます。具体的に言うと、一番大事な、直面しているのは原子力発電の扱いをめぐる問題だと思えます。今より立派にすれば大丈夫かという話ですよ。基本的な方向性はそれでいいのか、「そんなことやれるものなのか」、「それではどうするのか」

ということですよ。

照らされ破られた時の出遇い

— ボランティアの方々から教えていただいたこと —

もう時間がないのですけれども、もう少し、今回の震災後に気づかされたことをプリン
トに沿ってお話ししたいと思えます。「あの日から現在まで」というところです。

私は先ほども言いましたように、宮古に三月一五日に着いたんですけれども、最初にお
寺に上がっていったら、連絡をして行かなかったので、みんながビツクリして暗いところ
ら出てこられました。近所の人たちも一緒におられ、「どうやって来たの」って。そして
ら、もう数年前に亡くなりましたけれども、九十何歳の、すぐ近所に住んでおられたおばあ
ちゃんが出てきてくださいました。あの頃は知っている方のお顔を見たら、本当に、「生
きてたの、良かった〜」ってお互いに抱き合うような感じだったのですが、そのおばあ
ちゃんが私の手を握ってくれて、「命がありました」っておっしゃったんです。それが私
が宮古に戻って聞いた最初の言葉でした。本当にそれは忘れられないですよ。そのおば

あちゃんだけでなく、みんながそういう気持ちだったと思います。町内でも知ってる方が何人も亡くなっているんですよ。その人のことも常に思ってお言葉です。「命がありました」「当たり前の話すぎるかもしれないかもしれませんが、毎日ご飯食べているのだから、命がありましたっていうことですよ。当たり前のことのようですよ。当たり前ではない。

全然関係ないような話ですけど、Youtube という動画投稿サイトに、豚さんやいわゆる「家畜」といわれる生き物が殺される映像がたくさん載せられています。まっすぐ見続けられないような映像がいっぱい出ています。可哀想って言ったら本当に失礼なのですけど、私はそうしたことも気づかないふりをしておいしいものを食べ続けようだけしています。でも、実際はあの悲鳴の上にいるんですよ、私たちは。気づこうとしたら気づけるはずなのに。別に、豚が高度で何が高度じゃないということは言えないと思いますし、高度であるから大事でそうでないから大事でないとことも言えないことだと思いますが、豚さんの脳は、たとえば犬とも変わらない。穏やかで、豊かな感情があつて、殺される直前まで人間のことを信頼している。それが突然殺されていく。怖くて嫌でたまらない。そういう状況の上で生きていながら、その私が考えていることはひたすら自分のことだけ。

「ああ、困ったなー」とか「今日の私はどう生きよう」しか考えてない私ってあるんだな
って思います。関係ない話を突然して申し訳なかったですけれども。話を戻しますと、
「命がありました」って言うてくださったおばあちゃんのお言葉の背後には、たくさんの
亡くなった命があるわけで、私たちも、今もそういう繋がりの中にいるということが言い
たかったのです。

震災後、最初の一ヶ月間は、状況としては特に厳しかったです。電気、水、情報、全て
が不足していました。そして亡くなった方が発見されると、お棺に入れて遺体安置所に納
める、そしてみんなでお勤めをする。そういうことを続けました。そこで教えられた三つ
のこと――そこに記しておりますけれども――は、今も被災地の方は忘れていないと思っ
ます。まず一つ目は、人間の力は小さく、想定はもろいものだ、私が見ていると思ってい
ることは本当にごく一部だ、ということなんです。次に、二つ目ですが、わたしたちの命はあ
って当たり前のもので決してない、「有ること難い」ものであるということが知らされ
たと思います。そして三つ目は、私の命は決して今生きている私一人のものではないとい
うこと。これもとても大事なことであると思っています。

しかし、生き残った、助かった人たちにも、自分のものさしははたらいってしまうわけ

で、「どうして私は助かってしまったのか」「どうしてあの大事な人が亡くならなければいけないかったのか」と自分を責めることにもなるのです。その時に、「どうぞ、あなたはいっかり生きていって」という亡くなった人の本当の願いですよね。その願いに触れてはじめて、「私はしっかり生きていかなければいけないんだな」ということに気づけるんじゃないかと思います。

四月中旬以降、連休前ぐらいから、交通状況が良くなって、たくさんの方の支援物資が来るようになりました。そして、ボランティアの方々もたくさん来てくださいました。しかし、そこで見えてきたのは、先ほどもお話しした私自身の姿です。具体的に言うと、私は被災された方を支援する側に立つ時もあるし、全国の皆さんからの支援を受ける側に立つ時もある、自分の立場がコロコロ変わります。その度に私の心もコロコロ変わるんです。さらに、私のものさしで想定もしていない言葉をかけられたりすると、本当に落ちこんだり、時には腹が立ったりすることもありました。私は何のためにこの活動をしているんだらうって、何も考えられない時もありました。子どもに「お父さん、すごい暗いけど大丈夫？」みたいに声をかけてもらう時もありました。その時に、私にとって一番大切なのはたらしきをくださったのは、先ほどもお話しした、一緒に歩いてくださったボランティア

イアの方々だったんです。最初に来てくださったのはさつきもお話しした愛知県の豊橋の方々でした。その方々を引つ張って連れてきたくださった方の、最初にお会いした時の顔を私は忘れることができないんです。四月の早い段階で、すごくたくさんさんの支援品を持ってきてくださったんですよ。まだまだ寒かったので、「温かい物がいっぱいいるよね」って、その方は豊橋で運送会社をされていてご自分で大きなトレーラーを運転して、お医者さんや本当にいろんな方と一緒に来てくださったんです。ボランティアとしてはすごく規模の大きなものでした。大きなトラックで来てくださったって、中からはまず小型トラックが出てきたんですよ。「届かないところにはこれで持っていくんだ」って。それから大きな鍋を持ってきて、「宮古もアサリがたくさん採れると思いますけど、豊橋もアサリが名産なんです。温かいの、食べてください」って、いっぱい持って来てくださいました。そのような感じで、あの当時、規模としてもすごく大きなご支援で、多くの方が本当に喜ばれました。でもその方々のご支援を通じて私が大切なことを教えていただいたのは、支援の規模が大きかったからではなかったのです。

その方が最初に宮古に来られた時に、この状況を見て、ただただ目に涙をいっぱい浮かべておられるのです。「こんなにも、ひどいと思わなかったです」。そしてそういうお

心、お姿で、その人たちは本当に粛々と支援をしてくださいました。偉そうに、困ってない人が困っている人を助けている、そういう支援では全くなかったです。まさに「ごめんなさい」。自分のものさしが破られた時の、頭が下がった人の自然なお姿だったと思います。そして、そうした姿に触れると、みんなが「ありがとう」とおっしゃって、支援を受けられた方たちも自然に涙を流す、そういうことが本当にありました。そして私もその人たちに救われました。

命の繋がり、尊さ、ありがたさを実感するのは本当に大事なことですけれども、自分の都合で頭を下げたり下げなかったりするのは本当にはなくて、そうした自分のものさしが破られた時の、本当に心からの「ありがとう」「ごめんなさい」という気持ちが大切なんだなあと思いました。そして、その心は、自己中な私の中から出てくるものではありません。私のもものさしが照らされ破られた、その時に、立場の違う、状況の違う相手と同じ所にはじめて立たせてもらえらるんだと思います。それが仏教で言うところの「平等」だと思いません。看護師さんと患者さんという違いを超えた繋がり、あるいは先生と生徒という違いを超えた出遇いが、そこに開かれていくと思います。そういう出遇いを開かせていただいたという意味で、震災は私にとっては大事な「逆縁」であったと思います。そういう意味で

も、私たちもこれから、さまざまなお話があると思いますが、自分の経験を大切にしていきたいと思っています。

本当にまとまらない内容で不十分なお話ししかできませんでしたが、最後までお聴きくださりありがとうございます。また、ご縁があったらお会いしたいと思います。どうもありがとうございます。

——二〇一八年五月二五日——

